

下関市国際交流員 李 佳琦
(中国山東省青島市派遣)

「^{かいだん}新年快乐」

下関市国際交流員の李佳琦（リ カキ）です。今は旧暦のお正月で、中国人にとって最も大切な一家団らんの時期です。今年は残念ながら家族と一緒に過ごすことができず、寂しい気持ちで胸がいっぱいでしたが、テレビ電話でスクリーン越しに家族と一緒に新年を迎えることができたのでよかったです。午前0時の鐘声と共に聞く「^{xīnniánkuài lè}新年快乐」（新年あけましておめでとう）、「^{gōngxǐ fācái}恭喜发财」（たくさんのお金が手に入りますように）、「^{wànshì rúyì}万事如意」（すべてのことが思ったとおりにうまくいきますように）、「^{wànshì shèngyì}万事胜意」（すべてのことが思った以上にうまくいきますように）などの新年挨拶で、ホームシックの心が癒された気がします。

ところで、年越しの際にはスクリーン越しから爆竹の音が聞こえてきました。爆竹を鳴らすことは春節での大きな行事ということはご承知のとおりと思いますが、その理由まで詳しく知っている方はどれだけいらっしゃるのでしょうか。にぎやか好きだからですか。来る年を歓迎するためですか。去る年を名残惜しい気持ちで送り出すためですか。皆様はどう思われますか。

さて、答えを言う前に、ある昔話をご紹介します。
それは、中国の新年についての「怪談」です。

昔々、とある上界¹の宮殿に、体は牛、頭に角を生やした獅子のように見える怪力の妖怪がいました。その妖怪は名前が「年」で、神様に鎖で上界に縛られており、警護役を任されたその年の干支の動物に見張られていました。しかしながら、一年に一度、干支の警護が交代する日、つまり大晦日にその鎖が緩まるため、その隙に鎖を破り逃げてしまいました。

上界にいちゃ駄目だ、どこか他の場所に逃げなきゃ！

逃げた妖怪はすぐに下界²に飛び込んでいきました。下界をうろうろしていると、お腹がすいてしまいました。しかしながら、大晦日の時期はかなり寒く、なかなか食料を見つけることができません。

どうしよう。腹がへったな。なんでもいいから食べたい。

空腹感に襲われた妖怪は目眩を起こし始めましたが、その時、ぼんやりと遠くで動いている動物らしきものを見かけました。

よっしゃ！食べ物だ！

と思うやいなや、すぐその動物を捕えて食べてしまいました。

うめ～、もっと食いたい！

あまりの美味しさに、妖怪は勝手にその食べ物を自分の大好物と決めて、もっとたくさん捕まえようと、小動物と同じ匂いのする方向に向かい始めました。



¹ 上界：神界や天界とも言える。神様の世界。

² 下界：人界や凡界とも言える。人間の世界。

昔々、とある村で旧暦の新年を迎える村民達は、大晦日の夕食後、村の周辺を散策していると、獅子のような妖怪が突然現れました。その妖怪は牛のような大きな体と怖い角があり、現れたとたん、田んぼで遊んでいる子どもに襲いかかりました。

わあー！逃げて！はやく逃げて！

子供の死を目撃した村民は四散して村に逃げましたが、その恐ろしい妖怪は村の田んぼ辺りから離れずに、村民の後を追って村の方向に進み始めました。

しまった！こっちに向かっている。止めなきゃ！

もしあの人喰い妖怪を村に入らせたなら大惨事になるに決まっています。それが分かっているからか、一番逞しい村民がすぐシャベルを手にとって、村の前に立ちはだかりました。

この俺が絶対止める！村のみんなを守るんだ！

と叫びながら勇ましく妖怪に突撃しましたが、シャベル程度のものではその妖怪の角に勝てる訳がありません。

やばい！これは駄目だ！みんなはやく逃げて！

死にかけての勇者の喚き声を聞いて、村民たちはすぐ自分の家へ逃げ込み、扉にしっかりとかんぬきを掛けて閉めました。

しかし、シャベルも簡単に折るぐらいの怪力を持つ妖怪を、木製の扉で止められるわけがありません。

村の奥にいる村民たちは、一軒ずつ突破された屋敷から伝わってくる悲鳴を聞きながら、それが近づいてくるのを恐る恐る感じていました。

もうお手上げだ。

これで終わりだ。

さらばこの世よ。

「まさか自分の命も過ぎ去ろうとする旧年と一緒に去っていくなんて。」絶望に陥った村民達は皆、膝をガクガク震わせながら、えーんえーんと泣き始めました。



その妖怪はずっと上界に捕らわれていたせいか、お腹がすごく空いていました。小動物を完食したら、ご馳走様と言わんばかりに、妖怪は爪を舐めました。

これじゃぜんぜん足りねーな〜、もっと食いたい。

小動物と同じ匂いをする方向を見ると、動いている動物がまだ何匹か見えます。

よし！、もっと喰おう。

妖怪は小動物が群がる方向に向かいました。途中とある硬い棒を持った動物に邪魔されたのも気にせず、一気に倒してどんどん小動物を探しに進んでいきます。

その小動物の巣は木製でとても脆く、爪で押したら簡単に倒れます。

小さい動物は美味しいので食べ尽くします。

大きい動物は美味しくないけど邪魔だから潰します。

下界って楽しいな〜

妖怪は小動物の骨までガリガリ噛み尽くし、血まみれになるほどたくさん食べました。

ゲップっ！

食った食った〜

もう少し食べれそうだ、お菓子でももらおうか〜

と言いながら、妖怪は次の巣に目をやりました。

李氏は他の村からやってきた外郷人で、夫と子ども二人の4人家族で暮らしています。夫は竹大工で、屋敷に竹をたくさん置いています。

人喰い妖怪の騒ぎは、どんどん李氏家族の屋敷に近づいています。

さっきの声は隣の…

もうやめて！知ってるよそんなの！

李氏は泣きながら、子どもを懐にぎゅっと抱きました。

自分はどうなってもいいけど、どうしても自分の子達を守りたい李氏は、隣の喚き声に怖じけながら、腹をくくりました。

あなた、柴も竹も何もかも炉に入れて、火を付けて、あの妖怪を焼き殺しましょう。

勇者でさえできないことを…

迷う時間はない、もうこっちに来てる！

すると、李氏夫婦は屋敷にある柴と竹を一気に炉に詰め込んで、火を付けました。

グァァァァァー

妖怪の鳴き声はどんどん手前に来ています。

近づくな！

李氏夫婦は声高に叫びながら、燃えた柴と竹を窓から妖怪に投げつけました。

パチパチっ

火のついた竹は大きな音を立てて、

パックチックっ

と弾けました。

グァァァァァー

妖怪はびっくりしたように後退りして、燃えている竹の光とその屋敷の扉を見るや否や、いきなり大きな声で鳴きながら、ぐるりと引き返しました。



お菓子をもらうだけで、なんで神様が！！

上界にいたとき、神様は赤色の呪符で自分を封印し、また自分のことを逃がさないように、光を放つ法術と音を鳴らす法術も使っていました。

その呪符も法術も、当たるとびきっと痛いのがとても記憶に残っています。せっかく上界から逃げることができたのに、もう見つかってしまったの？！！

嫌だ！その光嫌だ！音も嫌だ！赤色も嫌だ！全部嫌だ！

上界で長い間捕えられていた妖怪は、かつてのような暗黒の日々に戻るのはごめんです。捕まらないように、神様が現れないうちにさっさと逃げなければなりません。

グァーグァー鳴いて、妖怪は小走りで小動物の巣を後にして、田んぼを飛び越え、山の奥に身を隠しました。

ここまで来たらもう大丈夫だろう。

一息つくと、本物の神様が姿を現して、

邪な畜生、よくも我が神殿から逃げて人間を好きなだけ食べましたね。

神様は呪符を左手に、右手で結印して法術を唱えました。

呪符は星のようにピカッと光ると、次第に明るくなって、神様が法術を唱え終えたときは眩しいほど輝きました。

嫌だ！神様嫌だ！法術も嫌だ！呪符も嫌だ！全部嫌だ！

妖怪がいくら叫んでもどうにもなりません。

法術に体を固められ微動だにできない妖怪は、絶望的な目で徐々に近づいてくる呪符をだた見つめることしかできませんでした。

嫌だ！嫌だ！いやーっ

呪符の光も妖怪の叫び声も一斉に消えました。

神様の姿も、まるで現れなかったかのように、どこにも見えなくなりました。

妖怪に襲われた村にやっと朝が訪れました。

散々にされた村と食べられた村民を悲しむ余裕はなく、皆李氏夫婦のところに集まりました。

どうやってあの妖怪を退治したの？教えて！

あの光と音はなんだったの？竹？

また来たら大変だ！うちにも竹をください！

扉に赤い紙も貼っているね？うちも貼っておこう！

災いから生き残った村民たちは李氏夫婦の真似をしました。扉や窓などの出入り口に赤い紙を貼り付けて、竹もたくさん用意しておきました。

翌日の夕方から、村のあちこちに焚き火ができて、大人が交代で竹を火につけて鳴らします。

パチパチっ

パクチックっ

この一晩、あの恐ろしい妖怪は一度も現れることなく、穏やかな夜を送りました。

効いてる効いてる！妖怪は赤色が怖い！妖怪は光と音が怖い！

妖怪退治のコツを、村民は口伝えで周りの村に広げ、また周りの村からさらに周りの村へと広がって行きました。

燃やされた竹にも新たな名前がつけられました。

パクチックだから、爆竹と呼びましょう。

扉と窓だけに赤色を使うのが不安と感じたのか、村民達は服までも赤色にして、そして子どもを安心して寝かせるため、枕に赤い小包も置いておくことにしました。



これでばっちり！

万全の策をとった村民達は、無事に一年、二年、十年、何十年を送ることができました。

めでたしめでたし。

時代とともに変化する習慣。

その中でも、大昔から長い年月に渡って後世に引き継がれているものは、いわゆる「伝統」というものではないでしょうか。

最初に妖怪に襲われた村の子孫以外、世の中の人々は爆竹を鳴らす理由と赤い紙を貼る理由をすっかり忘れてしまいました。もともと竹に火をつけるだけの爆竹も花火に変わり、音より見た目の華やかさが重視されて、また赤い紙も単なる紙ではなく縁起の良い文字が書かれた春聯^{れん}と福の字になりました。子どもの枕の下に置かれた小包でさえも、「祟りを抑えるお金」³が入るようになりました。

しかし、祖先の勇気を敬慕しているのか、祖先の知恵を賛美しているのか、それとも祖先の幸運を引き寄せているのかわかりませんが、その伝統は消えることなく引き継がれ、これからも、少しずつ変化しながら受け継がれていくのでしょうか。



それでは皆様、さっきの質問の答えが分かりましたか？

質問の内容は、どうして春節には爆竹を鳴らすか、ということでした。

その答えは……妖怪退治です！

³ 中国語は「压岁钱」、中国語では「岁」と「祟」は同じ発音。祟り（つまり「年」という獣、「年兽」）を赤い紙で包むお金で鎮圧するという意味合いで、大人から子どもに赤い小包を渡す。

この怪談は神話の伝説に私が少しアレンジを加えたものですが、この話を簡単にまとめると、「年^{nián}（年）」という大晦日にしか姿を現さない獣は、赤色と光と大きな音が怖いので、昔の人は赤い紙と爆竹を用いて「年」を追い払ったという話です。年獣に襲われず無事に新たな一年を迎えることを「过年^{guò nián}（年を過ごす）」で、そして新年を迎える時期の挨拶は「过年好^{guò nián hǎo}（よいお年を）」という言葉を使います。

というわけで、下関市の皆様、ご健康とご多幸をお祈りし、穏やかな新年を迎えられますことをお祈り申し上げます。

^{guò nián hǎo}
过年好！